



Title	住居に於ける空間連結手法の研究
Author(s)	東, 孝光
Citation	大阪大学, 1985, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/34952
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名・（本籍）	あずま 東	たか 孝	みつ 光
学位の種類	工	学	博 士
学位記番号	第	6 9 4 1	号
学位授与の日付	昭和 60 年 7 月 3 日		
学位授与の要件	学位規則第 5 条第 2 項該当		
学位論文題目	住居に於ける空間連結手法の研究		
論文審査委員	(主査) 教授 紙野 桂人		
	教授 上田 篤	教授 岡田 光正	教授 五十嵐定義

論文内容の要旨

本論文は、住居に於ける単位空間の連結手法についての研究成果をまとめたものであり、全体を序論及び六章に構成している。

序論では、本研究の目的とその意義、及び研究の方法について記述している。

第 1 章では、日本の伝統的な居住空間に於ける連結手法の萌芽とその後の発展を明らかにし、西欧に於ける場合との比較を行ない、日本の現代住居の中にも受け継がれていると思われる空間概念について考察している。

第 2 章では、日本の居住空間の歴史的な発展の中で単位空間の特質がどのように変化してきたかを示し、それと具体的な設計体験にもとづき現代住居の単位空間を三つの系に分類し、その他に交通及び緩衝の機能を担うものを連結空間として定義している。

第 3 章では、これらの単位空間及び連結空間が具体的な設計に用いられてどのような連結の型を示すかについて、五つの型に分類してそれぞれの特徴を明らかにし、これらの連結手法を用いた実際の住宅設計を通じて浮かび上がってきた〈スリット〉の概念の特徴と、それを用いて行う新しい型としての立体複合型連結手法について考察している。

第 4 章では、第 2 章及び第 3 章に述べた定義と分類にもとづき、50 の実際に設計、建設されて使用されている一戸建住宅についてそれぞれの連結手法の実態を記述し、その建設年代及び環境立地条件と連結手法の関係を分析したうえで、〈スリット〉の概念を用いた連結手法の設計実例での有効性を明らかにし、またそれが日本の伝統的芸術、芸能に於ける〈間・ま、間合い・まあい〉の概念を継承発展させるものであることを明らかにしている。

第5章では、完成し使用されている設計実例のうち4戸の例について、設計時からの住み手の対応とその後の生活の取り組みについての聞き取りや観察の内容を記述し、仕組まれた空間構成に関する住み手の意識と反応を明らかにしている。特に、住み手が設計時から積極的に参加することが、使い始めてからの住み手と居住空間との対応に良い結果をもたらすばかりでなく、住居の生き生きとした豊かさにも欠かせないものであることを示している。

第6章では、今後の住居設計に有効な設計法として、〈スリット〉の概念を用いて各種の要素を連結して居住空間を組み立てる手法を統括した構成的連結法を明らかにし、結論としている。

論文の審査結果の要旨

住居は人間生活の基底を支えるものであり、そのより良い可能性の追及は常に建築設計の基本的な課題となっている。

本論文は、住居における単位空間に独立性を保たせつつ、相互に結合して有機的な全体的効果を産み出す独自の連結手法を開発し、実際の住居設計によるケーススタディを通じて適用性を確かめたもので、その主な成果は次の通りである。

- (1) 日本と西欧における伝統的住居空間の比較考察を通じて連結手法の萌芽を見出し、その現代への継承を意義づけている。
- (2) 現代の住生活に必要な単位空間を3つの系に分類し、それらを自由に分離または結合するための間合いの機能を担うものとして、新たに連結空間の存在を定義し、その設計手法を明らかにしている。
- (3) 連結空間による空間連結手法を、ケーススタディとして50の実施設計に適用し、その設計条件、設計過程ならびに空間効果を考察検討するとともに、公表可能な事例について居住者の実生活を通じて出された評価を示して、その実効性を明らかにしている。
- (4) 設計過程における居住者の参加とその処方ならびに効果についても、設計実例を通して明らかにしている。

以上のように本論文は、住居設計の連結手法とその空間効果に関して独自の方法を開発し、多くの新しい知見を得たものであり、建築計画学の発展に寄与するところが大きい。よって、本論文は博士論文として価値あるものと認める。